

臺灣地誌

山田行元編

全

189
261

K120.27
171a

K120.27

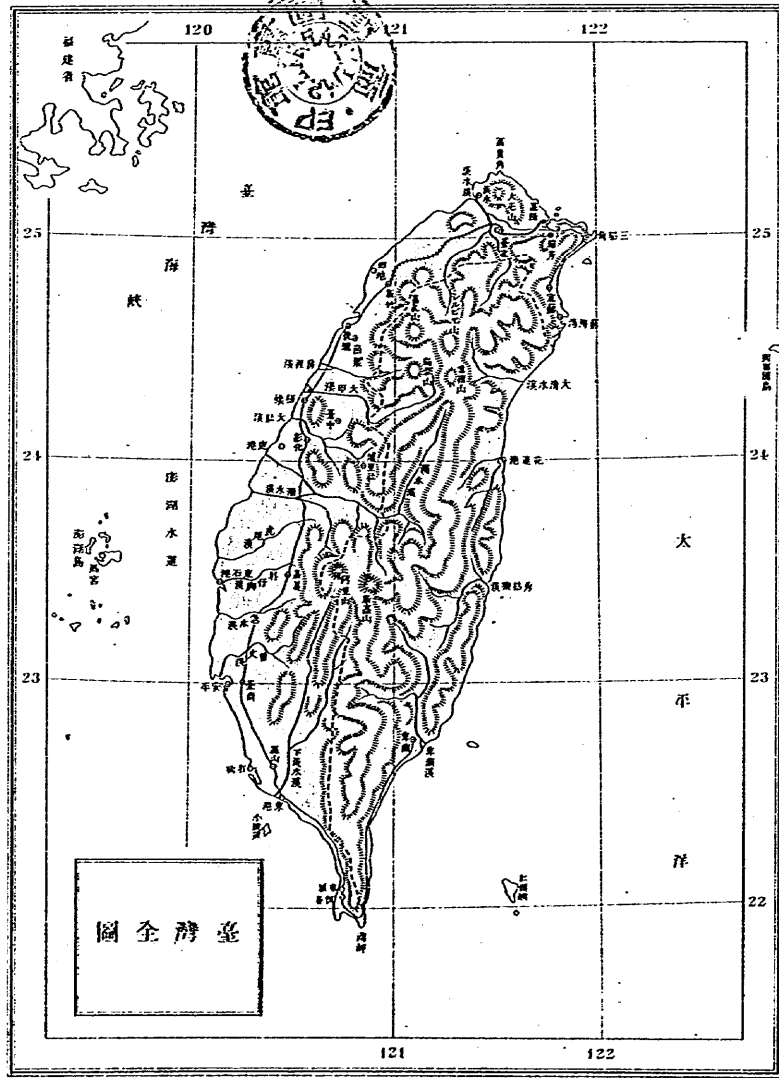
171a

緒言

我が帝國の新領地臺灣の地理は、小學校に於て適當の教案
て、これを授け、以て兒童の愛國の精神を涵養し、實業の思想
啓發せんことを勉めざるべからず、本書は、即ち此必要に應ぜん
が爲めに編纂する所なり、

本書は、高等小學校、日本地理の末尾に於て、これを課するを宜し
とす、但本書第一章は、學校の課程上の便宜により、日本地理復習
の際これを課するも亦可ならん、

本書は、冊子甚だ小なり、然れども予は其編纂に頗る力を費せり、
方今臺灣の地理に關する圖書は、精確のもの甚だ少なきを以て、
本書の草案成るの後、其疑はしきものは、或はこれを臺灣總督府
の當局者にたゞし、或はこれを實地の經歷者にとひ、校訂數次、漸
くこれを發行するに至れり、されば本書の資料の、斬新にして確



實なることは予が中心敢て他に譲らざる所なり、

臺灣地誌

山田 行元 編

第一章

第

臺灣の占領

臺灣は、明治二十八年我が大日本帝國が、清國より得たる所の新領地なり。當時我が國は、隣國朝鮮の獨立を扶け、清國の抑壓をとごめんが爲め、終に清國と戦を開き、我が陸海の大軍、向ふ所前なく、進みて清國の都北京に迫らんとするに及び、清國は恐れて和を請ひ、戦を止め、巨額の償金を出し、又臺灣及澎湖島を割

きて、これを譲りたり、此戦争は、我が國の義侠と勇武の名を、萬國に揚げたるものにて、臺灣は、實に我が忠勇なる將士の、血を流して得たる所なり、

第二、位置及地勢、

臺灣は、琉球の先島の西に近く、西北は、臺灣海峡を隔て、清國の南部と相對し、南は、呂宋といふ島に近し、臺灣は、九州よりも廣き一大島にして、南北の長と百餘里、東西の幅三十餘里あり、其面積は二千五百方里餘なり、

海岸は、著しき出入なく、良き港灣少なし、西の近海に澎湖列島あり、其澎湖本島と、白沙島、漁翁島との間は、

一大良泊地をなせるを以て名あり、

臺灣の内地には、北より南に亘る大嶺あり、雪裡山、新高山、阿里山は、嶺中の最も名ある山なり、新高山は、一萬三千尺餘ありて、富士山より高き峰なれども、富士山の如く美觀ならず、雪裡山は、新高山に比ふべき高山にして、近傍に又あまたの高山あり、其山脈甚だ大なり、

此大嶺の東部は、群山縦横に連なりて、平野少なく、海岸も斷崖海に迫る所多く、宜蘭の平野の外は、土地いまだ開けず、

大嶺の西部は、廣大の平野をなして、海にいたり、海岸

も遠淺の所多し、中にも中部以南の平野は、最も廣くして、長さ三十餘里、幅十餘里に及ぶ所あり、數多の河流此間を流れて、最も耕作に適す、河は濁水溪、上淡水溪、下淡水溪最も大なり、濁水溪は、雪裡山の南より出て、新高山間の溪流を合せて大河となり、下流はあまたの分流をなして、海に入る、河水甚しく濁るを以て、此名あり、上淡水溪は、雪裡山脈の北部より出で、あまたの支流を合せて、淡水港に注ぐ、水利頗る大なり、

第三、氣候及産物、

臺灣の氣候は、琉球よりも熱くして、冬も寒暖計五十五度を昇降するに過ぎず、夏は百度に達することあり、

産物



然れども夜間は、涼風至り、露多く結び、晝間の暑さを洗ふ、概して春、夏は、雨少なくして、旱多く、秋、冬は、淫雨頻に降り、濕氣殊に深し、氣候此の如く熱きを以て、椰子、芭蕉、竹等の植物盛に生ひ茂り、椰子實、鳳梨、龍

眼肉等の珍らしき果實多し、竹は其用甚だ廣く、土人は、巧に種々の器具を造り、其太きものを以て、桶、大鼓などを造る、又建築の用に供するもの多し、筍は年中常にこれを産す、内地の嚴冬積雪の頃も、此島にては、新鮮の蔬菜、瓜果を得べし、

中央の大嶺の西なる大平野は、地味肥えたる所多く、耕作の業盛に行はる、其北方の平野及丘陵に於ては、多く茶樹を植ゑ、製茶を輸出すること甚だ大なり、其南方の平野に於ては、盛に甘蔗を植ゑ、砂糖を輸出すること又甚だ大なり、米は一年に二回の收穫あれども、其結果は割合に宜しからずして、土人の食料に資

するに過ぎず、内部の森林地方には、樟樹多く、樟腦は茶、砂糖に次ぐ名産なり、

又山地には、鑛物の富あれども、採掘の業いまだ盛ならず、瑞芳の金、基隆の石炭、大屯山の硫黄は、今其名あるものなり、

内地よりの輸入品は綿布を第一とす、又外國より、阿片を輸入するの量甚だ大なり、是支那の移民は、鴉片烟を吸ふ恐るべき習慣を存するに由るなり、

第四、人民

臺灣の居民の數は、いまだ詳かならざれども、大凡二百八十餘萬なるべし、此居民の中に生蕃、熟蕃、支那の

支那移民及生蕃



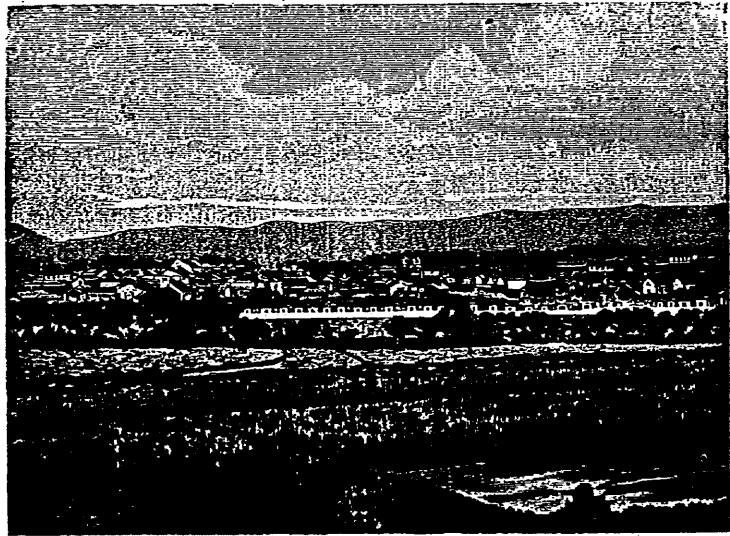
移民内地の移民の
四種あり、
生蕃は、本来の土人
にして、今は中部及
東部の山地に住む、
あまたの部落に分
れ、各其酋長あり、彼
等の風俗は、部落に
よりて異なれども、
多くは粗造の小屋
に住み、其傍に小

き耕地を有し、里芋、甘藷に、穀粉、鹽をまじへたるもの、
野獸の肉などを食ひ、麻布の袖せまく、丈短き着物を
着け、袈裟に似たる蕃布を纏ひ、男、女共に顔、手、足等に
いれずみす、其性質あらくして、銃、槍等を巧に使用し、
殺戮を擅にし、多く人の頭顱を有するに誇る、
熟蕃はれもに生蕃と、西部及北部地方の、支那の移民
との中間、一帯の地方に住む一種の土人にして、頗る
開化に進み、其風俗は、一見支那の移民に異ならず、彼
等は、土地を開き、耕作に従事し、又生蕃との貿易によ
りて、富を致す、
支那の移民は、臺灣のれもなる居民にして、人口の七

八分を占む、彼等は、耕作を勉め、又商業に長じ、富裕の者少なからず、臺灣の西部及北部の都會、村里は、主として彼等の住居する所なり、其風俗は、辮髪を垂れ、窄袖の上衣と、寛き股引を着け、木材よりも、寧多く瓦磚、泥土を以て造りたる家に住む、言語も、支那語を用ひ、地名の如きも、支那音を以て行はるゝもの多し、内地の移民は、占領日淺きを以て、其數甚だ少なし、然れども臺灣の地は、居民尙少なく、遺利甚だ多きを以て、内地より移住する者、將來益々増加すること知るべきなり、

第五、都會

臺北城



臺北は總督府のある所にして、市街整壯、人口十五萬餘ありて、臺灣第一の都會なり、其上淡水溪に沿ひたる街衢は、商業最も繁盛なる所とす、臺南は臺南の平野の西南部にあり、臺灣の最も舊き都會

にして、臺南地方の商業の中心たるを以て、人口多く、其繁盛なること臺北に次ぐ、臺中は、近來新に建てたる所にして、いまだ都會と稱するに足らざれども、其將來繁盛に赴くこと知るべきなり、其他新竹、彰化、嘉義、鳳山、宜蘭は、臺灣の名ある市街なり、

臺灣には、基隆、淡水、安平、打狗の四港あり、是支那領の時より、外國貿易の爲めに開きし所なり、基隆は、其泊地深くして、大船を入るべく、且つ内地より臺灣に航する者の、多く上陸する所なるを以て、近來俄に繁盛に赴けり、淡水は、茶の輸出甚だ盛にして、

盛大なる商店多く、臺北との間、小汽船相往來し、運輸甚だ便なり、然れども港内水淺くして、大船を入るべからず、

安平は、臺南の西凡そ一里にあり、水淺く、波あらくして、良港にあらず、打狗は、鳳山に近き一港にして、其形勢甚だ良けれども、只其水淺きを惜む、然れども臺灣の南部には、他に、良港なきを以て、砂糖の輸出を初めとし、貨物の集散多くは此二港に由る、

第六、交通及政治、

臺灣の道路は、甚だ修まらずして、旅行、運送困難を極めしが、近來大に其改修に着手せり、

鐵道は、基隆より臺北を経て、新竹に至るものあり、近來又此より、西部の平野を貫通する、鐵道を設くるの企あり、

安平より臺南を経て、嘉義に至り、臺南より鳳山、打狗に至り、又鹿港より臺中に至るの間に、今人車鐵道の設ありて、交通に便せり、

内地より、臺灣に至る海路には、壯大なる汽船の常に航通するあり、其長崎より基隆に至るまでは、凡そ二百八十餘里ありて、三晝夜にて達すべし、臺灣の沿海も、たもなる港の間には、常に汽船の航通あり、

電信は、内地より琉球を経て、臺灣に達するものあり、

其線は延びて、島中のたもなる都會及澎湖島に連絡せり、

臺灣の民政及軍政は、總督府此を掌る、而して其民政は、別に臺北、新竹、臺中、嘉義、臺南、鳳山の六縣と、宜蘭、臺東、澎湖の三廳を置きて、これを分轄す、右の六縣及宜蘭廳は、皆同名の市街にあり、又臺東廳は、卑南にあり、澎湖廳は、媽宮にあり、

第二章、

臺灣占領の結果、

臺灣の占領は、實に我が國の聲譽を萬國に揚げたるものなり、而して又實に我が國の勢力を増加したるものなり、即此占領に由りて、我が従前の領地の、凡そ十分の一強を増加し、又人民の殆十分の一を増加したるものなり、此領地、人民の増加に隨ひて、生ずる所の利益に至りては、一々數へ難しと雖ども、今其最も著しき事柄を擧げて、これを左に示さん、

其一は、内地の民を移して、臺灣を開く事是なり、

臺灣の北部及西部の平野は、支那の移民少なきにあらずして、其地概開けたれども、他の一半なる中央以東の地は、宜蘭地方の外は、概生蕃の住む所にして、其地いまだ開けざるを以て、將來我が政府は、生蕃を懷けて、内地の民を此處に移さば、山地には、無限の礦物の富を發くことを得べく、其森林に多き樟樹を伐採して、樟腦を製し、而して一方に於ては、樟樹の栽植を勉めば、其富源測るべからざるものあるべし、又卑南溪、其他沿水の茫茫たる原野を開かば、百萬の人民をして、盛に耕作の業を営ましむることを得べし、其他支那の移民の間にありては、工業いまだ開けずして、

日用の製造品の如きも、多くは他の輸入を仰ぐの有様なるを以て、内地の人の力によりて、興起すべき工業の種類、亦少なからざるべし。

其二は、内地に得易からざる産物を、臺灣より多く産出する事是なり、

我が内地の最も廣き地方は、温帶の中部に位し、温度甚だ高からざるを以て、甘蔗の如き、高温を要する植物に適せず、年々用ふる所の、砂糖の大凡三分の二は、外國の輸入を仰ぎしが、新領地臺灣の南部は、熱帶の中にあるを以て、甘蔗の耕作從來盛に行はれ、年々一千萬貫の産出あり、若將來益々これを獎勵改良して、

産額を増し、且つ從來粗製の儘輸出せしものに、精製を加へば、我が國用に供して餘あらんとす、又綿及藍の如きも、我が國にて、印度其他の輸入品を買ひ入るの量甚だ大なりしが、臺灣の地は、其栽培に適するを以て、將來は多量の産出を得て、我が國用に供すべきの望あり、麻も亦盛に生育し、一年に三四回の收穫あり、他日必一大産物とならん、其他内地に珍らしき植物の、特に此地に産し、我國を益すべきもの、實に少なからずとす、

其三は、臺灣を階梯をして、大に外國貿易を擴張すべき事是なり、

臺灣の地は、支那の南部と近く相對し、又後印度の安南、暹羅、東印度の呂宋、婆羅尼等を距ること遠からず、今や臺灣の我が領地に歸してより、汽船の航通頻繁となり、内地の人の移住又は通商を試むるもの、漸く増加せり、自今これを階梯として、更に進みて、支那の南部、後印度及東印度諸島に通商の路を開かば、其便宜を得ること頗る多かるべし、況や支那の移民は、性商賈にさがしきを以て、臺灣の物産を改良し、且つ交通、運輸の便を與へて、彼等をして、其故土なる福建、廣東地方等に通商せしめば、國家の益たること甚だ大ならん、近頃臺灣の沿海の蘇澳、舊港、後壠、梧棲、鹿港、東

石港、東港を、特別輸出入港となしたるは、蓋しこれが爲めなり、

右に述ぶる所によりて見れば、臺灣占領の利益は、實に甚だ大なることを知るべし、而して將來臺灣を開きて、此利益を實地に收むることは、全く我が内地の人の責任に屬せり、我が忠義、勇武なる軍人は、既に大功をたて、此新領地を得たり、我が有爲の實業家も、亦奮て其智識、技能をあらはし、此新領地をして、大日本帝國の、永久無盡の、寶庫たらしめんことを勉めざるべからざるなり、

臺灣地誌終

K120,2

地名一覽及其讀例

右傍の音は内地人の稱呼にして、左傍のものは臺灣の土音なり、

- 島 臺灣 澎湖島 白沙島 漁翁島 紅頭嶼
- 山 新高山 雪裡山 阿里山 〇河 濁水溪
- 上淡水溪 下淡水溪 〇都會 〇廳
- 新竹 彰化 嘉義 鳳山 〇廳 宜蘭 〇港
- 基隆 淡水 安平 鹿港 〇廳 蘇澳 〇港
- 後壠 梧棲 鹿港 〇廳 凍港 〇要地
- 卑南 媽宮 鳳山縣 宜蘭縣 新竹縣 〇廳
- 嘉義縣 臺南縣 〇廳 宜蘭廳 凍港廳 〇廳
- 澎湖廳 〇廳 〇廳 〇廳 〇廳 〇廳

明治三十年十二月二十日印刷

明治三十年十二月廿三日發行

明治三十一年四月四日訂正再版印刷

明治三十一年四月七日發行

定價金 八錢

著者

山田行

東京市牛込區二十騎町二十四番地

發行者

上原才一

東京市神田區裏神保町六番地

印刷者

佐久間衡治

東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地

賣捌者

大草常章

東京市日本橋區橋町二丁目一番地

版權所有

